

政宗公のビジョンに学ぶ

将来につながる

仙台のまちづくり

政宗公の時代から約400年の時を経た今、現在の仙台において、当時の面影を見ることが出来るのは、政宗公が50年後、100年後を見据えて、まちづくりを進めたことによるものと言えるのではないだろうか。今を生きる私たちも、こうした政宗公の考えに倣い、長期的な視点でまちづくりを考えていく必要があるようです。今年には政宗公生誕450年の節目の年です。今回は、その締めくくり、そして今後の仙台のまちづくりを考えるきっかけにするため、尚絅学院大学の千葉教授の案内により、政宗公の時代を感じられる各所を、紹介します。



仙台のまちづくりは
試行錯誤の繰り返し。
20年もの歳月が
費やされました。

【プロフィール】
1956年宮城県石巻市生まれ。早稲田大学を卒業後、商社勤務を経て1987年、有限会社まちのほり研究室を設立、歴史民俗学系博物館・資料館の展示設計業務に従事する。その後、東北大学大学院国際文化研究科に社会人入学し、学位取得。博士(国際文化)。1990年、研究者の道を進む決意をして会社を辞め、2007年より現職。研究分野は日本近世史、都市論など。仙台市史執筆委員も務めた。

【ナビゲーター】
尚絅学院大学
総合人間科学部 表現文化学科教授
千葉 正樹氏 (ちば まさき)

「仙台の城下町は、全国の研究者から「わかりづらい」と評価されるのが非常に多いです。仙台城と若林城という2つの核を持つ、双核都市の状態が10年ほど続いたことなどが、そう評される一因になっているのかもしれない。しかしそれは、政宗が試行錯誤を恐れず、まちづくりを進めたからだ」と私に話しています。私は政宗に対して、「試行錯誤を真正面から実践してやり抜いた人」というイメージを抱いています。

合理的で機能的
時代の流れをとらえた

仙台城下

町人からは
見えなかつた仙台城

政宗公のまちづくりに触れられる場所を、まずは仙台の城下町から巡っていきましょう。

そもそも、政宗公が入る前の仙台は、東部の薬師堂近辺がまちの中心であり、そこに古代以来の都市が開けていました。現在の仙台市中心部はと言うと、当時はまだ台地の上に広がる草原でした。ここに、新たな城下町をつくらうとした政宗公は、その中心を、石巻へと続く大町通と、江戸と津軽を結ぶ奥州街道が交差する芭蕉の辻に決めました。そして、城下の町割りを行っていったのです。

「この時代の仙台城下町の建設は、3つの段階に分けて考えることができます」と千葉さんは話します。「まず政宗段階で第I期と第II期の展開がありました。それを基盤に二代藩主忠宗が第III期の城下町づくりを行い、ほぼ完成します。第I期に関してですが、政宗が仙台城下町

が往来しやすい、『まち』としての機能に重きを置きました。

また、政宗公が入る前にこの地域を治めていた国分(こくぶん)氏時代、戦いのための城として既にあつた『千代城』を改築してつくつたのが新しい『仙台城』ですが、ここでも政宗公は、それまでの戦いの拠点などといった城づくりとは異なった考えを取り入れています。「政宗は城下に通じる東西南北の要衝はしっかりと防衛策を講じていましたが、関ヶ原の戦いを経て戦のない世の中になっていくことを想定したのか、仙台城には敵を威圧するような天守はつくりませんでした」。さらに千葉さんの計算によると、当時、まちづくりの起点である芭蕉の辻に立って青葉山を見上げて、仙台城の姿は町人たちからは見えなかつたということ、民衆にそ



現在の芭蕉の辻から青葉山を望む。この道幅は政宗公の時代とほぼ同じなのだとか。

建設の許可を得たのが慶長5年(1600年)、関ヶ原の戦いの直後でした。政宗は北目城(現在の太白区郡山)に拠点を置き、縄張りを開始しましたが、都市規模が大きいこと、試行錯誤の繰り返しで、城下町をつくるのに20年ほどかかったと考えられます。

20年と言うと、いかに試行錯誤を繰り返したかが分かります。その中で政宗公は、合理的に物事を判断し、無理のない、時代に合った城づくり、まちづくりを考えていきました。そのことは、まちの「道幅」と仙台城の『見せ方』に垣間見ることが出来ます。「仙台城下は、他都市の城下町に比べて、道幅が広く、全体として屈曲部が少ないという特徴があります」と千葉さんが話すように、この時代の城下町は、敵の侵入を防ぐため、道は狭く、城まで直進しづらいづくりが主だったのに対し、政宗公は、戦の時の防御よりも、人々

の姿を誇示するという機能は持たせていなかったようです。一方、もとは伊達家と同じぐらいの領主で、戦国時代を通して従えてきた家臣たちに対しては、その屋敷を眼下に見下ろし、荒々しい城の石垣部分を見せつけることで、しっかりとその存在をアピールしていたと千葉さんは分析しています。

こうしたところからも、政宗公の緻密な考え方がうかがえます。

「杜の都」と呼ばれた景色

次に向かったのは片平丁です。「仙台市史」にも記載があるように、仙台高等裁判所周辺は、上級武士たちの屋敷が立ち並んでいました。そこから青葉山方向に視線を送ると、今は見ることができない石垣や懸造(かけづくり)の景色を、想像の中で再生することができます。

「伊達家の重臣たちの屋敷が屋敷林を形成していて、それが面的に広がっていたので、まさに仙台城下は『杜の都』という風情だったのでしょう。政宗は、食用の実をつける樹木だけでなく、建築用材になる杉の木なども各屋敷に植えさせています。このような風景は上杉あたりにもあり、武家屋敷地区が大変広がったこと、それらが明治期まで残っていたことが、仙台が『杜の都』と呼ばれるきっかけになったのではないのでしょうか」と千葉さんは話します。

このあと、千葉さんが仙台の城下町建設の第Ⅱ期に位置づける若林城へ向かいますが、ここで政宗公の城下町づくりの姿勢をまとめていただきました。

「第Ⅰ期は戦時下に始まったこともあり、『千代城』を『仙台城』に改築したことや、地形の改変を最小限にとどめたことなど、使えるものは全部使って負担を減らすといった、無理をしない姿勢がうかがえます。次に向かう若林城下地域も、下層には、中世の地形や空間形態が残され、近代に接続しているのです」。

政宗公は古いものと新しいものを融合させる名手だったと言えるのかもしれない。

仙台城に次いで

第2の都市核となった

若林城

かつての都市域をリユース

冒頭でも触れたように、仙台城下町の建設は3段階にわけて考えることができます。その第Ⅱ期の城下町は、奥州街道の整備を経て、寛永四年（1627年）の若林城建設によって姿を現しました。なぜ、

の若林城下の水上交通網計画は、残念ながら未完に終わりました。しかし、政宗公は、この水上交通網によって国内交易とながり、仙台が経済都市として発展する姿を思い描いていたのかもしれない。

さて、政宗公の死後、若林城は、政宗公の遺言で廃城となり、その後は葉草園などとして利用されることとなります。当時の若林城下のまちの規模は、元の仙台城下と同じくらいの大きさであったと思われませんが、若林城が廃城になったあと、そこに住んでいた武士たちは、梅田川の南側に形成された新しい都市空間へと移っていきます。それが忠宗公による第Ⅲ期のまちづくりにつながっていき、仙台城下は完成を見ることとなります。



若林区役所裏手にある七郷堀。域内輸送網の構築の先に、政宗公は全国との交易を考えていたのかもしれない。

政宗公は2つ目の城を必要としたのでしようか。

「歴史学者の渡辺信夫さんが指摘しているように、寛永二年（1625年）、政宗の官位が上昇して中納言となり、一般の大名を凌駕してしまったことが挙げられます。息子の忠宗も大名と同格に扱われるようになったことで、同じ藩の中に大名が二人いるようなことになりました。組織が大きくなり、手狭にもなったことで生活空間も含めて別々の拠点を必要としたからではないかと考えられています」と、千葉さんは若林城建設の理由に言及します。政宗の隠居城であったという見解もありますが、政宗は最後まで隠居はしませんでしたので、その解釈は史実と異なるのではないかと千葉さんは指摘します。



地形と地域の特性を 読み尽くして普請

四ツ谷用水

大崎八幡宮との関わり

政宗公のまちづくりに対する考え方の一端に触れられるものとして、次に取り上げるのが「四ツ谷用水」です。当時、用水路の建設はどの地域でも行われました。しかし、政宗公が仙台城下の地形を読み尽くし、高度な土木技術で城下に水を行きわたらせたことと、その本流が現在も工業用水として活用されている点は、特筆に値します。

「四ツ谷用水」を巡るまち歩きの出発点は大崎八幡宮です。「大崎八幡宮がなぜ」と疑問に思うかもしれませんが、それは大崎八幡宮と「四ツ谷用水」の結びつきに、政宗公のまちづくりへの思いが見え隠れしているからです。

宗教エリアを生かす

「現在、大崎八幡宮が立つ、仙台市中心

そして向かったのが若林城跡。市街地から奥州街道沿いに、荒町、南鍛冶町、穀町と南下し、かつて若林城があった宮城刑務所の方向に歩みを進めます。

「政宗公は、若林城とその城下町を建設する際にも、国分氏がつくったものを再利用したのではないかと見られています。ある書状の中に『国分を通してものを運んでくる』といった記述があり、当時、若林の一面は、中世以来の都市的な機能を残していたことが推察されます」。仙台城とその城下町がまだ十分に機能していない時代、政宗公は、旧来の都市域を活用していたということのようです。さらに千葉さんは続けます。「そこで私は、若林城下を母なる都市、『母都市』と呼んでいます。政宗が最初につくった城下町は、『母都市』に支えられる状態が20年間ほど続きました。ですから若林城下は、都市としては仙台城下よりも古い時代に形成されたということになります。政宗は国分氏時代に形成された都市を2つ目の城下町づくりに生かし、再利用していることも仙台の城下町が複雑でわかりづらいといわれる要因なのでしょう」と、千葉さんは政宗公が若林城下もリユースした歴史に触れます。

全国につながる水上交通網計画

若林城があった場所に向かう途中、城下を流れていた堀の跡を見ることができ



大崎八幡宮の石段下にある四ツ谷用水の水路跡。

部から見て北西地域の一帯は、戦国時代も水を祭るお堂やお社が点在するエリアでした。そこに大崎八幡宮や、水乞い、雨乞いをつかさどる真言宗の龍宝寺などのお寺を移してこることによって、一体的な水に関する宗教エリアとしての性格をより強調した可能性があり、四ツ谷用水を大崎八幡宮によって守ってもらおうと考えたのかもしれない。昔の絵図を見ると、大崎八幡宮の裏手に大きな池が描かれています。四ツ谷用水の水が不足すると、その池の水を使ったようで、その意味でも、用水を守る場所だったのかも

「四ツ谷用水」を巡るまち歩きの出発点は大崎八幡宮です。「大崎八幡宮がなぜ」と疑問に思うかもしれませんが、それは大崎八幡宮と「四ツ谷用水」の結びつきに、政宗公のまちづくりへの思いが見え隠れしているからです。



若林城跡である宮城刑務所から西へ歩いて10分ほどのところにある古城神社(若林区河原町)。中世の仙台はこの辺りがまちの中心だったかもしれない。

ます。「堀の水が流れ込んで若林城をぐるりと巡って農地に流れます。これは六郷堀の跡で、今でも農業用水としてのイメージがありますが、若林城があった時代は城下の水路でした。四ツ谷用水と同じ役割を果たし、防衛の役目も担っていたのです」。

若林城跡を後にして、次に向かったのは若林区役所の南側にある養種園跡地です。ここには、広瀬川から引き込まれた七郷堀が流れています。「七郷堀も現在は農業用水として使われていますが、政宗は水路として利用するプランを持っていたようです。七郷堀から分岐する高砂堀を通過して七北田川方面に向かうと、梅田川に舟引堀という堀があります。そこから塩釜湾、北上川に結ぶという計画だったのかもしれない。農業用水というよりも、物資輸送路として捉えていたのが高砂堀や七郷堀ではなかったかと思うのです。そ

政宗公の人才登用で発展した 宮城の酒造り

四ツ谷用水の整備や北上川の治水などさまざまな土木工事を指揮した川村孫兵衛は、長門国(現在の山口県)から政宗公がスカウトしてきました。このように政宗公は、まちづくりのため遠方からも有能な人材を呼び寄せています。その一人として、大和(現在の奈良県)から招かれたのが酒造職人の又五郎なる人物です。又五郎は、切米十両と十人扶持と榎森(かやのもり)の姓を与えられ、藩用酒の醸造に従事しました。以来、幕末・明治期に至るまで、榎森家は仙台藩の御用酒屋を務め、仙台領内の醸造技術の発展、向上に多大な影響を与えたと言われています。



仙台市博物館裏手に酒造りに関する石碑。ここには、藩御用酒屋の清泉水の由来が記されている。

四ツ谷用水は「第二の広瀬川」

仙台を代表する広瀬川は断崖の下にあり、この時代、そのままでは川の水をまち場と利用することができませんでした。そこで広瀬川の上流、四ツ谷堰(せき)から水を引き、四ツ谷用水を整備しました。ものを洗う生活用水や防火用水、井戸を経由して飲み水にもなっていた他、四ツ谷用水は排水の機能も持っていました。仙台城下が広がる台地の上に湿地が点在していたために、四ツ谷用水を通して水を抜き、コントロールしていたようです。

「四ツ谷用水は、仙台城下を抜けると農業用水になるわけですから、非常に多面的な用途を持っていました」と千葉さんは話します。

四ツ谷用水の水の流路は、河岸段丘の

地形をよく読んで

つくられており、わずかな傾きを利用

してより遠くへと水が流れるように設計されています。

仙台の城下町の中では一番高い線に当たるのが北六番丁で、そこを馬の背を通すように本流を

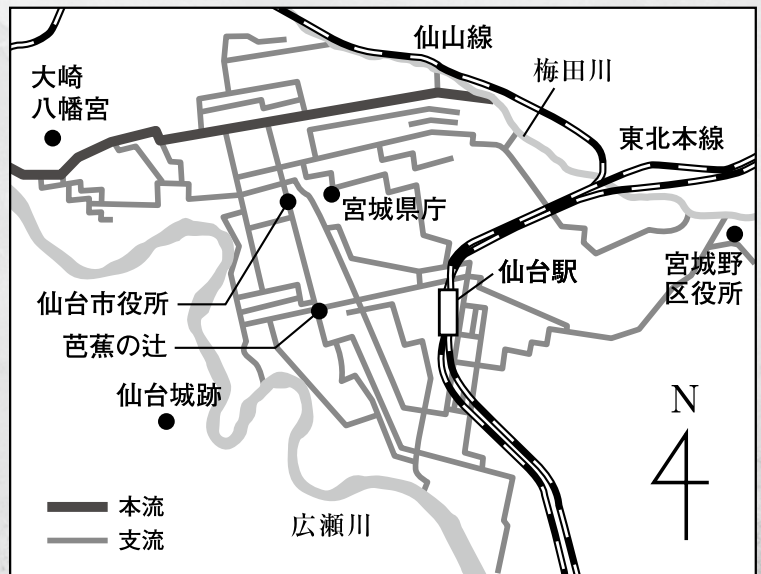
流し、その高い場所から左右に水を分けるように支流をつくって流して、

人々に届けました。「こうした点から見ても、四ツ谷用水は

極めて精密に計算



大崎八幡宮から東に5分ほど歩いた小高い裏道にある四ツ谷用水本流跡の標柱。



四ツ谷用水の流路(仙台市史『近世2』に基づき作成)

されてつくられた用水であることがわかります。郷土史家の佐藤昭典さんは、四ツ谷用水を『第二の広瀬川』とおっしゃっていますが、私も同じイメージを持っています。ただ疑問点もあって、四ツ谷用水の普請は仙台城下をつくった時ではなく、遅れて始まっています。その理由はわかっています。「仙台城下のまちづくりには、解明されていない謎も多いのです。」

これまで見てきたように、政宗公は、時代の流れを的確にとらえ、将来的なビジョンを持ったまちづくりを進めていたのでしょう。しかし、決して新しいまちを一から築き上げていったわけではありません。そこには政宗公の、古いものを大事にしながら、新しい考えも取り入れるという思想が表れています。「私がそれを強く感じたのは、大崎八幡宮の御社殿の中に入らせていただいた時です」と千葉さんは話します。「大崎八幡宮は、日本に現存している桃山様式が一番古い建物なのですが、当時最新の豪華絢爛なつくりになっています。しかし、改修工事の際、御社殿の中で私が見たものは『墨絵の世界』でした。仙台市博物館の元館長である濱田直嗣さんもこれをご覧になり、この墨絵には、政宗の『元々は室町幕府の大名である』という意識が表されており、社殿のきらびやかな装飾には『豊臣家の大名である』という意識が表れているということをおっしゃっています。これには私も納得するところがあり、この二面性のようなものが、政宗の魅力の一つでもあると思うんです。」

まちづくりや建築には、その時代のトレンドというものがあります。しかし古い歴史や伝統にも学び、しっかりと時勢をつかんで将来的ビジョンを持つ。そうした複合的な考え方が何百年も続くまちになっていくのだと、政宗公は教えてくれているようです。今に生きる私たちも、これから、持続的に成長していく仙台のまちをつくるために、このような考え方を参考にしていく必要があるのかもしれない。